教育改革への挑戦

はじめに

海老澤　栄一

一九八八年に新設された経営学部が完成年度を迎え文部省の審査枠から外されるのをきっかけに、これまで実現できなかった学部独自の教育理念を、教育システムの中で具体化しようという機運が芽生えたのは、一九九〇年の秋のことであった。いわゆる教育理念の教育実践化である。大学院の設置についての基本方針の決定がなされたのも丁度この時期であった。

教授会の付託を受けて「カリキュラム検討委員会作業部会」という名称のもとに三名の委員が選ばれ、そのひとりが筆者であった。他の二名が初代の教務委員長斎藤誠毅教授および学科主任（当時）常石敬一教授であったことを考えると、暇な教員を一人お手伝い代わりに入れておけば何かの役にたつかも知れないと、当時の学部長が思ったのかも知れない。これが暗くて長いトンネルへの入口であった。

他大学の仲間にカリキュラム改革の委員をやっていると誇らしげに語ったことが再三あった。その度に、気の毒そうな顔をされたのをついこの間のように思い出す。しかし彼らの同情がこの身に実感されるのには、そうたいして時間はかからなかった。九三年度入学生から実施するためには、少なくとも九二年の秋までに何らかの答えを教授会に答申し、実施に向けて動き出す必要があった。正味一年半の勝負である。

多少の手直し程度のカリキュラム検討であれば十分な時間であるかも知れない。しかし、本質的な議論をするとなるとかなり厳しい時間幅であることがわかってき

た。気がついたときにはすでに遅く、逃げ出すに逃げ出せない状況であった。泥沼の深みにはまり込んだというのが偽らざる心境である。途中、九二年四月から「新教育課程調整委員会」へと組織を新たにするとともに、メンバーを入れ換え補強し、後半の具体的かつ、詳細な詰めの段階に入った。企業の経営革新やリストラクチャリングでも同じように、改革に手を染めた人達は現状の仕事の仕組みを大きく変えることになるので、恨まれることはあるにせよ、感謝されることはまずないといって良いであろう。幸いなことにわが学部教授会は、われわれ委員の行動を暖かく見守ってくれ、時に叱咤激励の声をかけてくれたのがせめてもの慰めであった。

ここに特集される「教育改革への挑戦」は、本来ならば関係者全員が何らかの意思表示をすべき性質のものであろう。しかし今回は教育改革に主としてかかわった三名の共同作業で教育改革のプロセスを世に問うことにした。全体の一貫性を意識しながらも、それぞれが独立した形でしかも個人の責任で執筆した。教授会資料や委員会資料を丁寧に追跡し客観的に分析しかつ、それぞれの思い入れや評価を展開している。客観データの主観評価をもとにした何らかの匂いや味を読み手に感じとってもらいたいというのが、三人の共通の願いである。教授会の同僚を初め、関係者からの冷静かつ真摯な評価をいただければ望外の喜びとするところである。

本特集を担当したのは、新教育課程調整委員長の榎本誠助教授、前教務委員長の照屋行雄、それに無任所で「カリキュラム検討委員会作業部会」および「新教育課程調整委員会」の両方にかかわった海老澤栄一の三名である。当初、前学部長の箕輪成男教授にも大学教育の現状にかんして執筆していただく予定であった。しかし時間の都合がつかないということで、今回は見送ることとなった。前学部長には出版の企画までご相談に乗っていただいた経緯がある。出版企画リーダーの榎本に代わって敬意を表したい。

本特集は、以下に示すように最初に海老澤が教育改革の大きな流れを、次に榎本が新教育課程の詳細な改革プロセスを、さらに照屋が新教育課程の実施上の諸問題を、最後に三人の共同で今後の方向を語る、という四部構成である。教授会資料を随所にわたって引用させていただいたことへ感謝すると同時に、それぞれの担当箇所の文責はあくまでも本人にあることを付記させていただく。

教育改革への取り組み
教育課程のリストラクチャリング
新カリキュラム実施上の諸問題
新たなる大学教育を目指して

（えびざわ・えいいち／経営学部教授）